

みる 観察

三つめの庄内

満洲からのJターン入植

一般社団法人 北海道地域農業研究所

所 長 坂 下 明 彦

ちよつと古い話題になったが、昨年末にテレビドキュメンタリー番組の受賞作を一挙に放送するというNHKの企画があった。その一作目が山形放送制作の「三つめの庄内―余計者たちの夢の国」である(注1)。山形県の庄内地方から満洲にわたった移民が敗戦後の苦難の引揚げの後、再び北海道などへのJターン入植を行い、三つ目の庄内を作るというストーリーである。実はこのテーマ、私が大学院出た頃の頃から温めていたものである。道内の調査先で「庄内」部落に出会ったことから、山形県の母村まで出かけて調査(取材)を行ったこともある。思わず

筆を取りたくなってしまう次第である。満洲農業移民は昭和恐慌下の農山漁村経済更生運動にリンクされて本格化した(注2)。「適正規模論」によって過剰な農村人口を満洲に分村・移動させ、母村での規模拡大を図るとされた。しかし、深沢七郎『東北の神武たち』で描かれた農家の小屋棲みの次三男が移民の主体であり、土地無し層の移民では母村に新たな土地ファンドが産まれるべくもなかった。

山形県には満洲移民送出のリーダーであった加藤完治が設立した国民高等学校の前身の自治講習所があった。こうし

た下地があり、山形県は長野県に次ぐ満洲移民送出県となった。一九三七年から四三年までに県独自で送り出した開拓団数は大小合わせて三三、移民戸数は全国混成をあわせて三、三〇〇戸に及んでいる(注3)。

庄内の場合には、村単位での移住が難しかったため、各町村から郷を単位に移民を募集して「大庄内郷」を建設する計画が立てられた。一九三八年の三股流(計画戸数二〇〇戸)、三九年の馬太屯(同二〇〇戸)、四〇年の大和(三〇〇戸)、四一年の楊栄圀子(同三〇〇戸)、四二年の王福岡(同三〇〇戸)がそれである。

番組では、現在の黒竜江省の省都ハルビンから東部の拠点ジャムスまでの南回りの鉄道の間点にあった三股流を対象としている。入植は一九三八年で、一九四四年末には二二〇戸と予定戸数を上回る好成績を示し、団員数も八〇〇人の大所帯であった。松花江沿いの肥沃な土地であり、敗戦までは比較的順調に開拓は

表1 都府県からの戦後開拓農家の定着率

地区・県名		1953.10現在			1971.2現在		
		入植戸数	定着戸数	定着率	入植戸数	定着戸数	定着率
東北	山形	685	600	97.6	803	397	49.4
	小計	1,329	1,171	88.0	1,896	783	41.3
関東	東京	1,749	974	55.7	1,446	221	15.3
	小計	2,141	1,247	58.2	1,847	320	17.3
北陸	新潟	101	79	78.2	229	72	31.4
	小計	239	194	81.2	411	136	33.1
東山	長野	196	159	81.1	157	62	39.5
	小計	366	283	77.3	652	131	20.1
東海	愛知	175	95	54.3	143	33	23.1
	小計	327	193	59.0	256	74	28.9
近畿	大阪	694	380	54.8	534	91	17.0
	小計	1,062	608	57.3	807	166	20.6
中国	広島	206	163	79.2	209	43	20.6
	小計	258	210	81.4	296	63	21.3
四国	香川	146	109	74.7	170	41	24.1
	小計	237	177	74.7	279	65	23.3
九州	福岡	76	71	93.4	218	64	29.4
	小計	142	112	78.8	338	113	33.4
内地計		6,101	4,195	68.8	6,470	1,851	28.6
道内計		30,491	22,091	72.5	38,895	13,712	35.3

注1)1953年は『北海道農地改革史(下巻)』、1971年は『北海道戦後開拓史』(資料編)より作成。

進んだ。しかし、その後の混乱で犠牲者も多く、しかも故郷の庄内に帰ったのは一九四六年末であった。彼らには家産もなく、故郷での居場所はなかった。そこで、新たな入植地を求めて青森県六ヶ所村と北海道豊富町へと入植した。六ヶ所村では、核燃施設の設置に再び翻弄される姿と酪農村として地道に進む姿とが対

照的に示されていた。そして、北海道の豊富町では酪農化による現在の安定した姿が映しだされていた。

私が満洲からのＪターン入植に関心を持ったのは、戦後開拓農家の定着率の差に驚かされたからである(表1)。私の専門は農業史であるが、北海道の戦前のまともを終えて戦後に研究対象を移して

いた頃で、戦後開拓から着手しようとしていた。

戦後開拓の数字を見ると、入植が一段落した一九五三年では道内入植者が三〇千戸、道外入植者が六千戸であり、道内勢力が優位であった。戦後緊急開拓政策から「緊急」の字を取り、既存農家の次三男の分家が主流となったからである。しかも定着率は道内が七二・五％(戦後開拓政策収束時の一九

七一年には三五・四％)に対し、道外は六八・八％(同二八・六％)と低かった。

しかし、後者の定着率の低さは、一九四五年の都市戦災者の入植(拓北農兵隊)の動向を反映したものである。東京、神奈川、静岡、愛知、大阪、京都の六県の単年度の移住者は、道外移住者総数の半分、三千戸近くに及び、その定着率は四八・七％(同一七・二％)と低かった。これに対して、突出して定着率の高いのが山形県の九七・六％(四九・四％)と長野県の八一・一％(三九・五％)である。この両県からの満洲移民のＪターン現象が高定着率をもたらした、これが仮説である。偶然もあるが、「庄内」がターゲットとなっていた。

北海道の「庄内」との最初の出会いは、足寄町芽登地区の庄内部落である。隣には柏倉という名の部落もあった。もとの陸軍軍馬補充部の広大な土地の一部であるが、足寄町の市街地からは九州大学の演習林が邪魔をしており、迂回しなけれ

表2 山形県からの戦後開拓地と開拓農家
単位：地区数・戸

地方・町村名	開拓地区数	存続農家数	
		1961	1968
足寄	4	158	94
標茶・別海	8	123	93
天北	12	266	194
豊富	1	116	83
猿払	4	87	65
上川・空知	8	104	84
美瑛	1	22	22
美唄	1	20	20
その他	5	39	30
合計	44	935	685

注) 『山形県出身管外入植者名簿』
山形県、1968年により作成。

ばならない。この演習林、九州大学出身の田中敏文知事が、農地改革の時に何がしかの便宜を図って払い下げたとの噂も。九大演習林もまた、旧植民地の喪失によって代替として北海道に設けられたものらしい。いくつかの「庄内郷」からの「J」ターンが一〇九戸、山形市近郊の柏倉門伝村の「集合移民」からが五一戸であった。酪農が中心の営農であったが、全酪連系の和牛飼養も見られた。この調査をきっかけに、山形県にまで出向き、県史

編さん室や県の庄内支庁、上山市の柏倉門伝村で話を聞いた(注4)。

山形県からの戦後開拓移民地区を表2に示したが、入植戸数は私が最初にお邪魔した足寄町が最も大きい。当初の入植戸数はおよそ二〇〇戸にのぼると思われる。次に大きいのは豊富町のサロベツ原野への入植で一五〇戸近く、名前も庄内地区である。ここは、豊富町農協からの農業振興計画基礎調査の際に調査を行った(注5)。阿部又右工門さんというおじいちゃんに三股流開拓団やサロベツ原野開拓のお話を伺った。戦前と戦後を記した二冊の著書もいただき、本の紹介もしたことがある(注6)。ここでは、庄内開拓協同組合が山形側に組織されて、移民の送出と入植後の支援を行い、地元でも天北庄内開拓農協が独自に組織されていた。主に、馬太屯、楊栄圃子、王福崗の各庄内郷からの再入植者が多かった。一九五七年には山形県から次三男の入植も行われている。私も書いた農業振興計画

では、「戦前入植が馬鈴しょ作が可能な畑地で展開されたのに対して、戦後開拓者の入植は主として泥炭地において行われ、家屋もサロベツ川の氾濫を避けた海岸段丘や丘陵地に立地していた。一九七〇年以降、耕地開発や酪農近代化施設に対する補助事業が強化されていくが、それまでは営農条件・生活条件はともに劣悪であり、営農に耐え切れず離農が多発したことは紛れもない事実である。とはいえ、こうした劣悪な条件を克服して現在において酪農経営を立派に存続している農家が多数存在しており、彼らが現在の豊富酪農の担い手として、その大きな構成成分となっているのである」と記した。当時の思い入れを感じる。

第三の拠点である猿払町には、山形県の調査で紹介いただいた農家を訪問した。庄内に多い佐藤姓であったことを覚えていく。いくつかの酪農調査の折にも歴史部分の調査を行った。入植は一〇〇戸近くであり、浅茅野は旧飛行場跡の平坦部

であるのに対し、芦野地区は高台であった。後者は青年義勇隊開拓団の混成部隊によるＪターン入植であり、一般の戦後開拓農家より年齢が若いという特徴があった。排根線の埋木が基盤整備の邪魔をしていることを知った。

最後に訪れたのは、標茶町の弥栄（いやさか）部落であり、ここは山形県を含む全国からの移民からなっていた。戦後組織された満州開拓民自興会という組織があり、バックには満洲国起源の関係者がいると言われていた。この肝いりで旧軍馬補充部上川支所跡地の釧路標茶地区に二二、〇〇〇戸を入植させるというプランがつくられた（注７）。この拠点が弥栄である。一九三三年の第一次武装移民の「弥栄」の名前を継承している。この開拓団で団長を務めた東大農業経済学科出身の中村孝二郎氏が、新しい弥栄で一年間指導に当たっている。一つの責任の取り方ではある。虹別原野とその奥の泉川地区（別海町）にも開拓地が形成され

ている。九大と同じくここにも京大の演習林が開設されているのは偶然とはいえない縁を感じる。入植者は山形からの移民だけでも一五〇戸にのぼる。

二万戸という大規模な計画は実現されなかったが、ソ満国境ならぬ、北方領土との「国境」の存在が、パイロットフアームや新酪農村建設の背景にあると考えられるが、確証はない。

このように、私の研究生活において「庄内」は時々姿を表わし、しまいには私を中国東北部にまで導いたが、いまだ私の「三つ目の庄内」をまとめるに至ってはいない。そろそろ終活の時期に差し掛かっているが、自信はまだない。

（注１）ザ・ベストテレビ二〇二三名作ドキュメンタリー一挙放送 第一部二〇二二年日本民間放送連盟賞番組部門テレビ教養番組最優秀山形放送「三つめの庄内―余計者たちの夢の国―」（三浦重行ディレクター）。

（注２）満洲移民については加藤聖文『満蒙開拓団虚妄の「日満一体」』岩波現代全書、二〇一七年が最もまとまっている。

（注３）『山形県史 拓殖編』一九七一年による。以下同。

（注４）この際に県庁で北海道への移民創出を担当した大江善松氏へのインタビューが『満洲農業移民と北海道戦後開拓』『北海道農業』No. 8、一九八七年、である。

（注５）『低コスト・放牧酪農の可能性／豊富町農業振興計画のための基礎調査報告書』北海道地域農業研究所、一九九五年。

（注６）坂下明彦『満洲農業移民の営農実態と漢族・朝鮮族―A氏「三股流物語」或る満洲開拓団員の青春行状記』を素材として『日本の科学者』三〇巻一〇号、一九九五年

（注７）『北海道現代史 資料編２（産業・経済）』北海道、二〇一三年、第三章農業、「満洲」からのＪターン入植 一六八―一七二頁